C-1:研究力の強化と評価

開催日時・会場　9月14日（火曜日）　15:50－17:20　WEB-ONLY

研究者育成と研究開発評価の接点を試行する

若手研究者に対する科学技術政策における研究力強化の取り組みは、従来の研究開発に加えて研究者育成の側面からも盛んに施策が検討されています。とりわけ、研究者育成プログラムに類する新たな取り組みにおいては、将来の研究開発プログラムに向けた持続的な先行投資の狙いがあるなど、両事業の目的は距離を縮めています。

一方、URA等による研究支援については、自らの活動を、大学院生を含む様々なキャリア段階にある研究者に対する組織的な研究者育成であると捉えている支援者や組織も少なくないのではないでしょうか。直接的な支援の他、研究環境を整備することを介した貢献や制度も例外ではありません。

ここで、改めて考えてみたいのは、今後の研究者育成の目的が、高い研究成果指標を志向する個人を増大させることに集約され得るのだろうかということです。少子化に伴う研究者としての業務の増加や質の変化、研究資源の捻出と持続的配分の益々の困難さ、これまでとは性質を異にする競争的資金の存在などを背景に、若手研究者は今、研究活動における発想の転換の必要性を感じ取っているようです。

しかし、大学院生を含む若手研究者の早期人材育成の取り組みが活発になる一方で、研究成果との接点のあり方について議論を深める機会は多くありません。本セッションでは、その主たる接点として、プログラムや制度等の事業成果の共通的可視化手法のひとつである「評価」に主眼をおくことで、議論の場を試行してみたいと思います。学問の自律性の観点から研究評価の課題に取り組む研究者、大学院生の共通教育に取り組む研究者、そして研究開発事業について研究環境の観点を踏まえて取り組む行政官をお招きし、各取り組みにおける課題をお伺いしつつ、創造環境の自己持続に向けた若手研究者支援の役割について展望します。

オーガナイザー

仲野　安紗：京都大学・学際融合教育研究推進センター
次世代研究創成ユニット・特定准教授

東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻（保存修復建造物）博士課程研究指導認定退学。文化庁新進芸術家海外研修員としてMansilla+Tuñón Arquitectosに勤務、国立王室コレクション美術館を担当。以降、7年間にわたりスペインを中心に近代建築保存修復・設計に携わる。帰国後、京都造形芸術大学美術館大学構想ディレクター、京都大学学術研究支援室URAを経て現職。若手研究者などを対象に、創造環境形成と改善を通した支援活動に取り組む。

C-1:研究力の強化と評価

講演者

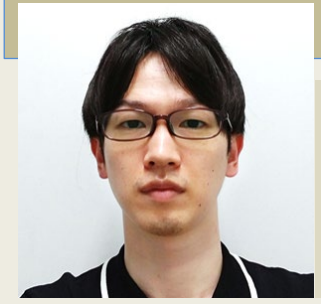
林 隆之:政策研究大学院大学・科学技術イノベーション政策プログラム・教授プログラムディレクター

東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻を修了し、博士（学術）を取得後、大学評価・学位授与機構評価研究部助手、同助教授、同教授を経て2018年より現職。研究活動および科学技術政策の評価システム・手法・指標を研究対象としており、文部科学省、内閣府、国立大学協会などの審議会や評価関係の委員会の委員を複数務める。

佐藤 万知:京都大学・京都大学高等教育研究開発推進センター・准教授

オックスフォード大学で博士（教育学）を取得後，東北大学，広島大学，京都大学の高等教育関係のセンターに勤務し，教員や大学院生の専門性開発に関連する実践や研究，修士および博士課程に在籍する大学院生の指導などに取り組んでいる。現在，大学教員を大学教員たらしめるものはなにか，という視点で，多様化する大学教員のあり方について考察することをテーマとしている。

池田 宗太郎:文部科学省・高等教育局大学振興課大学改革推進室大学院第一係・係長



京都大学大学院生命科学研究科博士後期課程単位取得退学（専門はウイルス・免疫学）、2018年文部科学省総合職技術系入省。科学技術・学術政策局政策課を経て、2019年7月より研究振興局基礎研究振興課にて、「戦略的創造研究推進事業」を担当するとともに、「創発的研究支援事業」の立ち上げ及び推進に従事。2020年10月、省内若手有志の取組として研究室環境や博士進学を考えるワーキンググループ「AirBridge」を設立。